

コリント人への手紙第一 8 章 1-13 節「弱い人々のつまずきとならないように」

小池 宏明 牧師

コリントにある諸教会では、異教の神殿の偶像にささげられた肉を食べることの是非が問題になっていた。

*知識を持っている兄弟たちへの理解

偶像についての知識を持っている人たちの主張にはパウロも同意しており、偶像の神々などを人間が勝手に作って勝手に崇めているだけで、実際には存在しないのだから、どこでも気にしないで、何でも食べたら良いということだった。(4-6 節) 当時は、神殿とか偶像に関係のある場所で、食事をとることが、社会通念のようになっていた。もし、このことが全面的に禁止されたなら、社会的に孤立してしまう人々もいる。パウロは偶像に対する知識があつて、偶像の神殿で偶像にささげられた肉を、気にせずに食べることができるクリスチャンたちの権利を保護している。

*敏感な感性をもつ兄弟たちへの配慮

一方で、パウロは、偶像の神殿などで偶像にささげられた肉を食べることに嫌悪感を持っているクリスチャンたちが居ることにも心を留めて配慮してほしいと言う。(7-10 節) 偶像に関わることはすべて避けたいという敏感な感性や避ける決心をしたクリスチャンたちに対して、知識を振りかざして、無理強いして、つまずかせないで欲しいと言うのがパウロの願いである。

*知識は人を高ぶらせ、愛は人の育てる

この 8 章の結論は「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」(1 節後半) である。この御ことばには普遍的な響きがあるだろう。人は知識では育たない。人は愛で育つ。正しい言動であっても、そこに愛が無いのであれば、誰かを傷つけたり、つまずかせたりしてしまうことがある。しかし、愛する人になれるように、愛ある人を育てるために必要な知識はある。一番、知っておかなければならない知識は、主イエス・キリストが、自らの命を捧げて、私たちを愛して、救いの道を開いて下さったことである。私たちは、救い主イエス様の地上の歩みによって、初めて、自己犠牲の愛を知った。

それゆえ、各自に与えられた信仰の秤(はかり)に応じて歩いて行こう。私たちの行動や言葉が兄弟姉妹を励まし、成長させ、人々をより神様に近づけるものとなるように祈りつつ歩みたい。